

The European Association for Sport Management Conference 2023 参加報告

青井 一真¹

1. はじめに

筆者は、同志社大学スポーツ健康科学会の大学院生国際学会発表奨励金を活用して The European Association for Sport Management Conference 2023 (以下、EASM) に参加し、口頭発表を行った。その参加・発表の報告を以下に記載する。第 31 回となった EASM は、2023 年 9 月 12 日から 15 日にかけて北アイルランドの首都、ベルファストにて開催された。今大会のテーマは、“Forward Thinking in Sport Management: Inclusivity, Accessibility and Sustainability (スポーツマネジメントにおけるフォワードシンキング：インクルーシビティ、アクセシビリティ、サステナビリティ)” であり、欧州各国からの参加者に加え、アジア、北米、南米、オセアニアなど、世界各国からスポーツマネジメント関係者約 550 名が参加した。欧州各地で持ち回りとなっている EASM だが、本大会は主催大学のアルスター大学 (Ulster University) が Europa Hotel にて開催した。例年通りではあるが、口頭発表とポスター発表の一般研究に加え、基調講演や EASM が設定した注目テーマに関するワークショップが行われた。一般研究とワークショップを合わせた全体の発表数は 345 題であり、発表者を国別に確認するとイギリス (81 題 23.5%) からの発表者が非常に多く、次いでアメリカ (56 題 16.2%)、ドイツ (33 題 9.6%) となり、日本からの発表者数は全体で 8 番目に多く、9 題 (4.0%) となった。また、ポスター発表は 23 題であった。

2. 発表内容

学会では、研究分野別に会場とタイムテーブルが整理されており、全 16 分野のうち Sport Governance and Policy が最も発表者が多かった分野となり、次いで Sport Consumer Behavior, Diversity and Inclusion Issues in Sport Management, Sustainability and Sport Management となった。筆者の発表は、最終日の Sustainability and Sport Management のセッション内での発表となった。演題名は、“The Economic Impact of

Covid-19 on the Japanese Sport Industry in the Use of a Satellite Account Methodology” とし、日本のスポーツ産業を明らかにする日本版スポーツサテライトアカウント (以下、日本版 SSA) を活用し、2019 年から 2021 年にわたって新型コロナウイルスが日本のスポーツ産業に与えた影響について検証した内容について発表した。同研究は、2017 年から株式会社日本政策投資銀行、株式会社日本経済研究所、同志社大学の共同研究として続けられている。今回の発表者は、筆者に加えて庄子博人氏 (同志社大学)、桂田隆行氏 (株式会社日本政策投資銀行)、田村恵氏 (株式会社日本政策投資銀行) であり、さらに調査協力者である川島啓氏 (釧路公立大学)、Kokolakakis Themistocles 氏 (Sheffield Hallam University) とした。発表当日は、筆者が本研究の背景や方法論、日本のスポーツ産業に関するデータを中心に説明した後、Kokolakakis Themistocles 氏が英国や諸外国のスポーツ産業に新型コロナウイルスが与えた影響について説明した。国際学会における発表は、昨年に続いて二度目となったが、英語での自身のプレゼンテーション経験不足や質疑応答への対応力不足を感じた部分もあり、来年パリで開催される本学会では博士論文における研究をより一層進めた上、発表内容の充実度や発表スキルを上げて臨みたいと思う。

3. その他の発表内容について

本大会の基調講演は、Simon Shibli 氏 (Sheffield Hallam University)、Simon Darcy 氏 (University of Technology Sydney)、Mike Weed 氏 (Canterbury Christ Church University)、Alison Doherty 氏 (Western University) の 4 名が担当し、大会テーマにも含まれるインクルージョンやサステナビリティの観点に焦点が当てられた。特に、筆者の大学院修士時代のスーパーバイザーでもあった Simon Shibli 氏は、大人の身体活動やスポーツにおける雇用やボランティアを性別や人種、宗教や障害の有無といった切り口だけでなく、細かくカテゴライズするインターセクショナルリティに

1 同志社大学スポーツ健康科学研究科 (Graduate School of Health and Sports Science, Doshisha University)

目を向ける重要性を説いた。実際、南アジア系や黒人系におけるスポーツ観戦やミュージアムに行く割合が低く、公営の図書館の利用率は高いことが分かっているため、良い教育を受けることで高収入を得て良好なエリアに居住できるようになる人が増えることによってスポーツ参加率が上がることに繋がっていくことをデータで示した。そうした人種差別に起因する収入格差や教育格差に目を向け、研究事例を増やしていくことの重要性についても言及した。

また、Larissa Davies (Sheffield Hallam University) らの研究グループが発表した“Measuring the Value of Recreational Physical Activity in Aotearoa New Zealand. An Inclusive SROI Approach”では、スポーツの社会的価値をテーマとしており、とても興味深い内容であった。ニュージーランドのスポーツ参加(身体活動)を主体とした、スポーツの価値の試算に取り組んでおり、Social Return On Investment (SROI) アプローチに基づいた研究を紹介していた。ニュージーランドの先住民であるマオリの人々への質的調査も行った研究結果では、ニュージーランドにおけるレクリエーションによって生み出される身体活動が 168.1 億ドルの価値を生み出し、SROI 値が 2.12 ドルと算出されたことを報告した。これはレクリエーションの身体活動に 1 ドル投資すると、個人や社会に対して 2.12 ドル相当の社会的価値が生まれることを意味する。自身が取り組む研究においても社会的価値への理解を深めていきたいと考えていたこともあり、非常に有益な発表となった。

先に述べたように日本人または日本の大学に所属する研究者の発表も多く、口頭発表が井上雄平氏 (Manchester Metropolitan University)、山下玲氏 (東洋大学)、備前嘉文氏 (國學院大學)、Chen Chin-Kuang 氏 (長崎国際大学)、山口志郎氏 (流通科学大学)、押見大地氏 (東海大学)、依田龍汰氏 (Manchester Metropolitan University)、筆者の 7 名であった。ポスター発表は遠藤華英氏 (同志社大学)、西尾建氏 (山口大学) の 2 名であった。ワークショップは Wong Donna 氏 (早稲田大学) の 1 名であった。また、高田紘佑氏 (German Sport University Cologne) が ESMQ New Researcher Award の候補者として発表し、見事に受賞を果たした。

4. 国内外研究者とのコミュニケーション

EASM へは、筆者の大学院修士時代から合わせて 6 回目の参加となった今学会だったが、学会開催前のレセプションパーティーより Sheffield Hallam University の Kokolakakis Themistocles 氏や Olga Polyakova 氏を含む研究者らと交流を持ち、学会期間中もさまざまな研究者らとコミュニケーションを持つことができ

た。学会初日には、今後の日本版 SSA の方向性等を議論するために Kokolakakis Themistocles 氏と Larissa Davies 氏を交えた研究ミーティングを実施した。さらに、最終日には井上雄平氏とも研究ミーティングを実施し、今後の研究活動に有益な関係性を作ることができた。最終日夜に出席した、北アイルランドの観光名所であるタイタニック・ベルファストで行われたガ



写真 1 発表中の Kokolakakis Themistocles 氏と筆者



写真 2 左から早川琢雄氏 (株式会社日本政策投資銀行)、Olga Polyakova 氏、Kokolakakis Themistocles 氏、Larissa Davies 氏 (Sheffield Hallam University)、筆者



写真 3 日本人・日本からの参加者

ラディナーでは、筆者と同じセッションでスポーツイベント開催地の土地価格についての研究を発表した Hur, Chan Hyeon 氏 (University of South Carolina) と互いの研究について議論を交わし、母校でもある Sheffield Hallam University の研究者との交流を重ねた。国内外の研究者たちと積み上げたネットワークを活用し、世界に通じる研究成果を生み出したいと思う。

5. まとめ

今大会を通して印象に残っている出来事は、海外の研究者と対面でコミュニケーションを取ることができ、自身の研究活動を推進する機会を得られたことである。スポーツマネジメントにおける世界の潮流を肌で感じることは、自身のレベルアップのためには何より重要なことであることにも気づくことができた。次回の EASM は、2024 年 9 月 3 日から 6 日までパリで開催される。研究活動をより一層推進させ、次回発表で巻き返すことを誓いたい。